

オンライン授業による大学の国際交流から広がる 新たなスタイルのグローバル教育とその可能性

上智大学は、文部科学省の2018年度「大学の世界展開力強化事業」において、お茶の水女子大学・静岡県立大学との3大学合同構想<図>の採択を受け、国際協働オンライン学習プログラム（Collaborative Online International Learning：以下、COIL）を積極的に活用している。コロナ禍において、オンライン授業による海外大学との交流はどのような成果を上げているのか。上智大学が取り組む新たなグローバル教育の現状と展望について聞いた。



伊呂原隆 教授 李ウオンギョン 特任助教

米国10大学をはじめする海外大学と連携し 全学をあげてCOIL型授業を展開

COILは、ICTを用いてオンラインで海外大学との交流を行う教育手法である。上智大学は、「大学の世界展開力強化事業」の採択を受け、2018年度よりオンラインによる協働学習と国際交流に力を入れてきた。その導入により、①経済的理由や大学の履修カリキュラムの関係上、留学の機会を得にくい学生に授業で国際交流の機会を提供すること、②文化的背景の異なる多様な学生同士が協働学習を行うことにより、課題に対する多面的な理解や複眼的な思考力を習得すること、③相手先からの映像や双方向コミュニケーションを利用した効果的な学びが可能になることを期待している。

「本学は以前からグローバル教育には特に力を入れてきた大学ですが、新型コロナウイルスの感染拡大による入国制限で留学のための渡航や、海外留学生の受け入れが制限されている中、オンラインによって海外大学との交流を続けることができ、COIL型教育の有用性と意義を改めて実感しています」と語るのは、上智大学のCOIL統括責任者を務める伊呂原隆教授（学務担当副学長）だ。連携する海外大学は、米国のパートナー大学10校のほか、ASEAN諸国（タイ、マレーシア、ベトナム、フィリピン）や東アジア（モンゴル、韓国）にも広がり、コロナ禍においてオンライン授業による国際交流をますます推し進めている。

「使用言語の壁がなく連携しやすい外国語学部をはじめ、理工系から社会科学・人文科学の分野まであらゆる

学部・学科で、それも語学科目でなく専門科目でCOIL型授業を導入している点が本学の大きな特徴です。2018年度から現在まで実施例は約100科目に及んでいます」（伊呂原教授）

多様な背景を持つ各国の学生たちが 専門分野で闊達なディスカッションを展開

具体的には、どのような科目でCOIL型授業が行われているのだろうか。上智大学グローバル教育センターに所属し、COILの導入と推進に力を注いでいる李ウオンギョン特任助教に印象に残っている実施例を挙げてもらった。

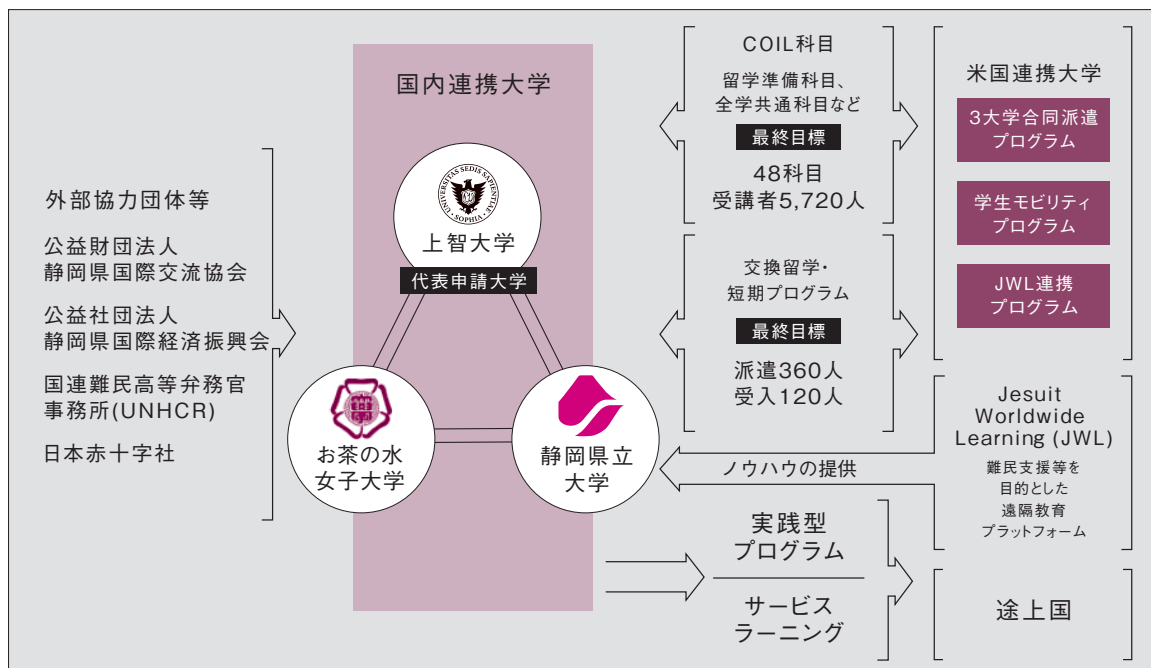
「看護学科の授業では、本学と静岡県立大学、モンゴル、アメリカの大学をつなぎ、性教育についてディスカッションしました。性に対する各国の違いが明らかになるとともに、モンゴルで実は非常に先進的な性教育が大学入学前に行われていることがわかり、『発展途上国だから性教育も遅れているのではないか』といった先入観を持っていた日本の学生は大いに驚き、刺激を受けたようです。また、履修カリキュラムがタイトな看護学科の学生は留学の機会を得にくいいため、『COILを通して海外の大学生とつながれて有意義だ』と非常に好評でした」

ほかにも、日米の組織に関する考え方を比較して論じ合った経営学科の事例や、国際教養学科の近代芸術史の授業で米国の演劇・ダンスの授業と連携し、日米合作のグループワークでプロジェクト学習を行った事例もある。

「私が実施した5つのCOIL型授業の中では、現代アジア社会の理解をテーマに、ワシントン州のゴンザガ大学とお茶の水女子大学・静岡県立大学をつなぎ、ジェンダー

<図>上智大学・お茶の水女子大学・静岡県立大学合同構想

「人間の安全保障と多文化共生に係る課題発見型国際協働オンライン学習プログラムの開発」の概要



(上智大学COIL事業パンフレットをもとに作成)

問題についてディスカッションした授業が印象的でした。日本だけでも、女子大と地方の大学、そして留学生や帰国生の多い本学と、非常に多様な背景を持つ学生がいて、そこにアメリカの大学生が加わり、自分たちにとって身近なジェンダー問題について論じ合うわけですから、盛り上がりがないわけはありません。皆、身を乗り出すようにして興味津々で授業に参加していました」(李先生)

李先生の授業では、日米合わせて100名ほどの学生がディスカッションに参加した。オンライン授業での国際交流とあって、語学力が高いハードルになることは避けられないが、同じパートナー学生と4～5回の授業を積み重ねることもあるため、次第に気心が知れ、最初は言葉の壁に臆していた学生も、積極的に議論に参加するようになったという。

「語りたい意見をテキストでまとめておくなど事前に準備したり、掲示板機能を活用して会話を補ったりすることもできます。時差の問題を解消するために、時には双方のディスカッション風景をデータで送り合い、意見交換の材料に使うこともあります。学生がどんどん能動的になって成長していく様子がうれしいです。学生たちには、評価基準は英語力ではなく、自分の専門分野のトピックスについて下調べをして、相手にわかるように伝えることが重要であり、そこがCOIL型授業の評価ポイ

ントになると、常々言っています」(李先生)

**COILの取り組みと成果を生かし
より深化したグローバル教育をめざす**

国内3大学と米国10大学の連携によるCOIL事業は、文部科学省の事業としては2022年度で満期終了するが、上智大学ではその後もオンラインによる国際交流を継続・発展させていく方針だ。伊呂原教授が今後の展望を次のように語る。

「将来的にパンデミックが収束し、海外大学との行き来が自由にできる状況になっても、COIL型授業で得た知見や成果に基づくオンラインによる教育手法は、極めて重要なツールになると思います。留学する学生はもちろん、留学しない学生にとっても、オンラインを活用した専門分野での国際交流が期待できます。また、海外の学術会議などに参加する教員や、発展途上国に行く学生も本学には多いので、国際会議の様子をレポートしたり、海外大学の授業を紹介したりするなど、新たなグローバル教育の構築に向けて、COIL型の教育手法は大きな可能性を秘めているのではないかと感じています」

海外に学術交流ネットワークを持つ教授陣が多くいるのも上智大学の強みだ。そうした特性を生かし、より積極的で能動的なオンラインの活用に舵を切るべく取り組んでいる。